

ず第一に上級幹部あるいは古兵に対する反感というよ  
うな形までたきつけられたような格好で、一番先に乗  
り出したのは私たち初年兵クラスだったと思いますけ  
れども、まず朱に交われば赤くなるで一番染まりやす  
い私ども、若い者は一生懸命やっただと思えます。とに  
かくこの間、日の長かったという日はほとんどなかっ  
たような記憶があります。

二十四年の七月帰ってきました。

## ある炭坑の思い出

岩手県 高橋 信男

入ッして俘虜生活の第一歩を踏み出した土地、それ  
は名も知れぬハルボンという小落であった。時は昭和  
二十年十月末ころである。私は一八一部隊、武装解除  
後、興安に集結し、そこから患者護送してチチハル病  
院に行き、その病院部隊と一緒に入ッしたのである。  
収容所へ入って、すぐ発疹チフスにかかり、二週間ほ

ど四十度の高熱にうなされ、同僚から、もう助からな  
いだろうとうわさされるほどだったそうだが、奇蹟的  
に命をとりとめた。その発疹チフスが蔓延し、八百人  
のうち二百人くらいが罹病し、死亡者が多数にのぼっ  
た。しかしその後のソ連の本腰入りのシラミ退治、  
熱気消毒が功を奏して、病気も下火になり、衛生兵で  
あった私の病院勤務も終わり、本格的な外の作業に移  
った。ここでの作業は、道路、建築、炭坑であった。  
この中で炭坑の作業が一番つらく、だれもがいやがっ  
ていたが、これは本人の意志にかかわらず、のがれる  
ことができない。それがついに私に回ってきたのであ  
る。半ばあきらめながら、炭坑組の仲間と、汽車に揺  
られて、作業に出た。この炭坑は規模が小さく、地下  
にエレベータで降りた記憶がない。何でも斜坑を歩い  
て地下へ入ったことを覚えている。地下何メートルあ  
るだろうか、実に狭い坑道である。それに帰りは、入  
ったときと違い地形は変わっている。オヤ、変だなあ  
と不思議に思うほどまた狭くなっている。腰を曲げ、  
身をよじって出てこなければならなかった。設備も満

足にない、いつ死人が出ても不思議でないような、危険なところであった。

最初は坑木運搬をやらされた。坑木を一番奥の穴を組み立てているところまで運ぶのである。長さ一メートル五十センチ、直径十七センチもあるうか、しかも生木でなかなか重い。体の自由のきかない狭い坑内では、外で運ぶようなわけにはゆかない。初め腰を曲げ前に倒れそうにして歩いてしたが、どうしたわけか、ランプが消えてしまった。一瞬、真つ暗やみになる。そのうち奥の方からかすかに明りが流れてきた。そのときは三人一組のグループで運んでいたが、私は最後にいた。もう歩くこともできず、坑木につけていた針金を引っ張りながら這（は）っていた。三人は軍隊の匍匐（ほふく）前進のような格好で二、三歩ズルズル這（は）っては、グイグイと引く、また這う。この繰り返して、いくらか進めない。時々遠くで、カンカンという音がする、坑夫が作業しているに違いないが、距離も方向も見当がつかない。この暗やみの中に三人とも閉じこめられたような恐怖がわいてくる。かすか

な明りを求めて、必至になって這う。突然前方にいた同僚が「アア、アア」と叫ぶなり、ピーピービチャビチャと異様な音を立てた。私はとまって声をかけた「おい、どうした」「いや急に腹が痛んで下痢をしてしまった」「何、下痢」とんでもないことになった、這ってゆくところは排便してしまっただけ「おいしつかり片づけてくれよな」「そんなこと言っただけ、何もかぶせるものはないよ」「仕方がない、道の真ん中か、右か左か」「右だ右だ」いつまでもとまっているわけにもいかないので、そろりそろりと用心しながら右を避け、這ってゆくと、手のひらに生暖かいものがぬらりときた。しまったと思っただけ、どうにもならない。とうとう手や体に汚物をつけ、悪臭をかきながら目的地まで運んだ。

このように地底でうごめくウジ虫のごとく働かされ、いまさらながらとらわれの身が情なく、望郷の念は日ごとに強まるばかりであった。外はシベリアといえど八月の夏は暑く、坑内に入ると、冷気が身にしみる。加えて食糧事情は悪く、満州から略奪してきた大

豆、小豆の給与である。朝は大豆と小豆のかゆ、昼は百五十グラムの黒パン、夕食はまた大豆、小豆のかゆである。なれない食物は、普通でさえ下痢をするのに、坑内へ入って腹を冷せば下痢を起こすのも不思議でない。下痢をしても食わなければ仕事ができない。かゆにはコッテリと油が入っている。食えばまた下痢の悪循環で、身はやせ細り、栄養失調者が続々と出てきた。私も下痢と発熱で病院へ行った、熱は三十八度近くあった。しかし仕事は休めないという。人の話では、三十八度以上でなければ休めないとか、あるいは患者の一日の定員が決まっています、それ以上休めないとか、いろいろなことが言われていた。それが本当ならば、全くひどい話だ。どこの世界にこのような非人間的な扱いをする国があるのか。この悲しみと怒りをどこへ持っていったらよいか。しかしおれたちは俘虜なんだ、どんなことをされても仕方がないんだと最後はあきらめに落ちるよりなかった。

私はスゴスゴと室へ帰らなければならなかった。全身だるく疲労した体と、重い頭を抱え作業に出かけた。

ちょうど夜勤だったので、例の夕食を済ませ、ハルボンからアルバカルの炭坑へ五キロほどの道を無蓋貨車の冷めたい板に腰をおろした。空に丸い月が輝いていて、広々としたシベリアの野をあやしいまでに照らしていた。まるで死界の荒野を走っているようである。汽車の音も、人々の話声も耳に入らず、ただ黙って、輝く大きな月を眺めていた。疲労と空腹と熱のため、いつになく感傷的になっていた。今こゝで見ている月も、故郷で見る月も同じ月、親や兄弟、同胞がこの月を見て考えているだろうか。そんなことを思いながら、今この体で、あの地獄のような炭坑へ入って行かなければならないと思うと、自然に涙が浮かんでくるのであった。このような炭坑生活も、短かい夏が過ぎ去る八月下旬から九月にかけて腸チフス患者が蔓延し、私は再び病院勤務となった。苦しかった炭坑と別れ、今度は腸チフス患者と、死の対決を迫られる生活が待ちかまえていたのである。それは何故か、薬も設備も満足にない、弱った体で、いわば自分の力でどれだけ持ちこたえるか、いつ自分が感染して同じ運命をたどる

か。ダモイを夢みて果てしなく続く、シベリアの生活であつたからである。

## シベリア抑留

岩手県 田山 司郎

第七師団第九十連隊第二大隊第五中隊の衛生兵長であつた。

第九十連隊より兵隊百数十人と衛生兵二人派遣の命令が下り、八月一日ハロンアルシャンを出発。八月三日奉天の旧張作霖の兵舎に入る。満州の各部隊から派遣された混成部隊である。

八月六日、ソ連軍が侵入して来たという情報が伝わってきた。

八月十五日、重大放送があるから倉前に整列せよとの命令。皆緊張して待つ。正午ラジオより終戦の詔勅の放送。日本は降伏。皆呆然自失。なすすべを知らず悲嘆にくれる。

何日か過ぎて部隊は長蛇の列をなして行軍を始めた。夜になって奉天郊外の山中に野営した。

夜半に「敵襲」の声。我が班の栃木県出身の菊地一等兵が軽機関銃を持って飛び出して行く。

「パパバン」と暗やみの中で軽機関銃の音がする。やがて静かになつた。敵は退散したらしい。菊地一等兵帰つて来ていわく。「夢中で撃ちまくっていたら弾が出なくなつて困つた。」と。夜が明けたら松林の間に日本軍の被服が山積みになれているところがあつた。昨夜は満人の襲撃だつたらうと思う。

八月末、奉天の北陵に集結し武装解除を受けた。うら若い看護婦さんたちが坊主頭になつて戦闘帽をかぶり、軍服を着て男装している。必死の変装だ。

九月の初め有蓋貨車にすし詰めにされて奉天を出発。ソ連兵のカンボーイ（歩哨）はダモイ（掃遣）だと言う。汽車は走つたり停まつたりで、まことに頼りない。一週間ほど野菜が全然食べられなかつた。歩くと膝頭がガクガクする。どこかで停車していたら満人がネギを売りに来た。皆はそのネギにかじりつい